

小中学生向け講座の企画実践を通じた社会教育士養成の学び

—岐阜大学全学共通教育科目「学習者の特性と支援方法」における試み—

二村 玲衣^{*1}・酒井 研治^{*2}・後藤 誠一^{*1}

益川 浩一^{*1}・成原 嘉彦^{*1}

本稿では、全学共通教育科目として令和5年度より開講した授業「学習者の特性と支援方法」における小中学生を対象とした講座の企画・実践の試みを報告するとともに、本授業で企画された講座に参加した小中学生の反応や、講座実践を終えた受講生の学びについて検討したい。

〈キーワード〉社会教育士（社会教育主事）、生涯学習支援論、アクティブ・ラーニング

1. はじめに

社会教育主事養成課程、社会教育主事講習に関する学習内容の規程改正により、令和2年度より「生涯学習支援論」、「社会教育経営論」という科目が新たに編成された。本稿で報告する岐阜大学全学共通教育科目「学習者の特性と支援方法」は、令和5年度より開講したもので、社会教育士(社会教育主事)養成課程科目として社会教育主事講習等規程第11条に規定された「生涯学習支援論」に該当するものである。

本授業を計画するにあたり、受講生の到達すべき目標を、「多様な背景や特性を有する学習者にそった学習の支援ができるようになること」と定めた。この目標に達するため本授業では、学習理論、学習者の多様な背景や特性、学習の環境、ファシリテーションについて理解するための講義と、実際の講座を企画し実践するアクティブ・ラーニングを組み合わせた。特に、これまで社会教育士(社会教育主事)養成課程では中心的に扱われてこなかった子どもに焦点をあて、小中学生を参加対象とした講座の企画立案から実施までを体験できる構成とした。

こうした学びをより実践的なものとするため、小中学生を対象とした講座事業を展開する株式会社エクスプローラー代表取締役の酒井研治氏に非常勤講師として参

画いただき、岐阜大学地域協学センターの専任教員とともに授業を担当した。また、企画立案の段階では、受講生のグループ活動を支援する役割として、同社のインターンシップ活動で講座の企画実践経験をもつ大学生・大学院生(以下、インターンシップ生とする)が授業補助にあたった。

初回にあたる令和5年度の受講生は18名で、うち11名は社会教育主事任用資格・社会教育士称号の取得希望者である¹⁾。所属学部は教育学部、地域科学部、医学部、応用生物科学部、工学部、社会システム経営学環であり、全学共通教育科目として開講されていることから幅広い学部から参加があった。また、子ども向けのイベントを企画・実施することを軸とした授業であることから、地域課題や教育に対する関心の高い地域科学部や教育学部の受講生が多く、小児医療を志す医学科の受講生もいた。

本稿では、令和5年度新規開講科目である本授業での取り組みを報告するとともに、講座の企画から実施まで取り組むことによる受講生の学びについて検討し、本授業の意義や今後の課題を整理する。

2. 本授業における取り組み

(1)本授業で企画実施した講座について

*1 岐阜大学地域協学センター

*2 株式会社エクスプローラー

Learning for Training Social Educators through Planning and Practice of Lectures for Elementary and Junior High School Students-Trial in "Characteristics of Learners and Support Methods" in Gifu University's General Education Course

上述したとおり、本授業では小中学生を参加対象とした講座の企画立案から実施までの一連の流れに取り組んだ。18名の受講生を4グループ(5名×2グループ, 4名×2グループ)に分け、グループごとに別個の講座を企画実施することとした。

本授業ではこの講座を、酒井氏が「知的探求部」として展開している1日完結型の講座形式を参考に設計し、以下に述べる条件のもとで企画することとした。

まず、物理的な条件である。会場は不二羽島文化センター内の中央公民館会議室、日時は6月25日(日曜日)の午後13時から、3時間以内とした。これは講座を確実に実施するために教員側で調整したものであり、講座遂行のためにやむを得ない制約であった。また、会場が決定していることから、講座内の活動は会場の利用規約の範囲内に限定し、例えば調理などの火気を使用する活動や、屋外での活動などは不可とした。

次に、内容面での条件である。この講座は、「授業」として参加者に学びや気づきを得てもらうため、テーマを定めたいえで参加者に到達してほしい学習目標を設定することを必須とした。また、参加者の主体的な学びを引き出すという社会教育的な学習支援の観点から、講座企画の際に意識すべき要素としてアクティブ・ラーニングを提示し、具体的には①参加者が学び合う場面、②探究型の学習、③参加者が何らかの形で学びをアウトプットできる活動、の3つを組み込むことを条件づけた。

なお、参加者の募集については、本授業内で広報活動に十分な時間をあてられる見込みがなかったため、予め岐阜県教育委員会にご理解をいただくとともに、岐阜市教育委員会および羽島市教育委員会の協力を得て、連絡帳システムを利用し両市内小中学生とその保護者へ情報を配信いただいた。

(2)各日程の授業内容

本授業の開講形態は、学部の特科科目や他の教養科目と重ならない日程での開講を望む社会教育主事任用資格・社会教育士称号の取得希望者からのニーズに応じ、4日間の集中講義とした。ここでは日程ごとの授業内容を記し、どのように上記講座を企画実施していったかを示す。

①第1回(令和5年5月13日):実践に向けたインプットと講座テーマ設定

授業初日は、本授業を開講するに至った経緯や到達目標について示すオリエンテーションの後、本授業で受講生が企画実施する講座についての説明やインターンシップ生による事例紹介を行い、受講生をグループ分けした上で講座のテーマを決めるワークを実施した。

講座のテーマ決めにあたっては、基本的にはグループのメンバーが専門的に学んでいることからテーマを考案することとした。学校外での学びの場となるこの講座において、小中学校では得がたく、その道の専門家であるからこそ小中学生に提供できる学びをテーマとして考案することで、参加対象者の特性にもとづいた学びの支援方法を検討することにつながると考えたためである。具体的な手順としては、まず、KJ法を用い、各グループで自己紹介を兼ねて自分の所属や専門、関心等を付箋紙に書き出し、グループ内で共有した。そして、互いの専門や関心が重なり合うところや近いところを探りながら各グループで開催できるテーマを検討した。

その上で、参加対象である小中学生が惹きつけられ、保護者が参加させたいと思うようなテーマの掘り下げ方やアピールポイントを考えた。ここでは、導入として、各受講生がこれまでに受けてきた授業の中で楽しい、面白い、素晴らしいと思ったものを付箋紙に書き出し、なぜその授業がそう思えたかをブレインストーミングするグループワークを行った。共有された事例や意見をもとに各グループで講座について考案し、講座タイトルや、参加者の到達目標や講座のねらい、大まかな講座構成へと落とし込んでいった。酒井氏から「受講者の顔や能力を想像しながら、どういう仕掛けをしたら、どういう発問をしたら盛り上がるか?を考えていく。みなさんの発想をそこに活かしてほしい」と投げかけ、各グループのテーマが親子にとって興味を惹かれるような言葉や流行している話題とつながるようにファシリテートした。

1日目の最後には、受講生全体での情報共有のため、各グループの講座テーマや概要を発表しあった。教員や補助役のインターンシップ生のみならず、受講生間でも質問や意見が交わされ、テーマと目標、内容の整合性に対する指摘や講座としての見せ方についての提案などがなされた。

②第2回(令和5年5月28日):講座内容と参加者募集に向けた準備

2日目は、講座内容を具体的に決定し企画書を完成させること、参加者募集に向けたチラシと申し込みフォームを完成させることを到達目標とした。

講座内容については、はじめに講座内に組み込む活動と全体的な構成、時間配分についてグループごとに話し合った。その後、講座実施に必要な物品の洗い出し、当日の各メンバーの役割について検討を進め、実施に向けた企画の具体化を進めた。この間、教員3名とインターシッ生1名が各グループを回り助言、支援した。各受講生は企画した講座が参加者にとってもたらす成果や満足について考え、グループによっては講座内容に立ち返りながら、参加者目線での講座企画を進めていった。

参加者募集に向けたチラシの作成に際しては、酒井氏から「企画そのものの価値を理解させようとするのではなく、参加対象者となる小中学生やその保護者が求めているものは何かを考えながら、この企画への参加を通してどのような利益を得られるかを示すことが効果的な広

報となる」と要点が示された。各グループで作成されたチラシは、図1-1のとおりである。

想定以上に議論や作業への時間を要し、またグループによって進捗の差が大きくなったため、当日に向けたタイムテーブルやイレギュラー対応を想定したマニュアル、参加者アンケートの作成は各グループの宿題とし、提出物に対して教員からコメントする形で実施に向けた準備を整えた。講座応募者への対応は教員からの事前指導を踏まえながら各グループで対応することとした。

③第3回(令和5年6月25日):講座の実践

3日目は不二羽島文化センター内の中央公民館にて実際に講座応募者の小中学生を迎え、各グループで講座を実践した。11時から同センターで最終打ち合わせと設営準備をはじめ、12時半から受付し、13時から4グループの講座が並行して実施された。各講座は2時間半～3時間行われ、受付から終了後の保護者引き渡しに至るまで、小中学生や保護者への対応は基本的に各グループへ一任した。特段のトラブルやイレギュラーは起こらず、いずれ



図1-1 各グループで作成したチラシ

の講座も予定通り終了した。各講座の内容や様子は次章で詳しく述べることにする。

④第4回(令和5年8月6日):実践の振り返りと最終成果発表

4日目は、これまでのグループ活動と講座実践を振り返り、成果発表を行った。午前中から昼過ぎにかけてグループディスカッションの時間とし、最終成果発表に向けて、①授業の構成や内容、②準備段階での活動内容、③実践当日の振り返り(参加人数や学年、参加者からの反応、当日起きた問題と対処方法等)、④準備から実践までを通して、良かった点と改善すべき点、といった事項について話し合い、発表資料を作成した。発表資料はあえてパワーポイント等のデジタルデータではなく、模造紙にまとめることとした。このような手段をとった理由は、グループ内での作業分担が特定のメンバーに偏ることを防ぐため、また、グループを見回る教員に作業状況を把握しやすくするためである。なお、この間、酒井氏が各グループを周り、講座の準備段階から実践までの講評を行った。

最終成果発表会は、各グループで発表10分、質疑応答5分の時間をとり実施した。発表の際には、受講生全員に付箋紙を配り、発表に対する疑問や意見、改善策の提案などを書き出しながら聞くこととした。この付箋紙は全グループの発表終了後、グループごとに取りまとめて渡し、本授業最後の課題である個人の振り返りに活用できるようにした。質疑応答においても積極的な受講生間のやり取りがあったものの、時間に限りがあったため、付箋紙を活用したコメント交換の機会を設けることにより、発表を通じた学びをより深めることにつながったと考えられる。発表終了後は上述した個人の振り返りレポートを書く時間をとり、全4日間の集中講義を終えた。

3. 受講生が企画した講座と実施の様子

ここでは、各グループで実施した講座の内容やその展開と、実施の様子について記す。なお、本章では混同を避けるため、本授業の受講生を「学生」、企画した講座へ参加した小中学生を「参加者」と表記する。

(1)グループ1:「音楽」

グループ1では、音楽は難しいものではなく誰もが親しめるものであると伝えることをねらいとして、音楽の楽しさを探究する講座を実施した。当日は、小学3年生が2名、4年生が2名、5年生が2名、6年生が1名、中学2年生が2名の計9名が参加した。講座の構成と具体的な展開は以下の表の通りであった。

表2-1 グループ1の講座タイムテーブル

時間	活動内容
13:00	オリエンテーション
13:10	曲タイトルを当てるクイズ
13:20	ハンドクラップでリズムを取る授業
13:35	さまざまな道具で演奏する映像を視聴
13:50	楽器づくりの説明と実践
14:55	リズムで曲を作る
15:25	合奏練習
15:45	発表と意見交換

オリエンテーションで学生の自己紹介や趣旨説明を行った後、テーマへの導入としてクラシック曲の動画を流し、タイトルを当てるクイズを実施した。ここでは、カミーユ・サン＝サーンスの「白鳥」、ニコライ・リムスキー＝コルサコフの「熊蜂の飛行」、ヘンリー・マンシーニの「子象の行進」を曲の題名を伏せて流し、「どんな動物を表した曲だろうか?」と参加者に問いかけ、音楽が表現できる幅の広さ、自由さを伝えた。

次に、後の曲作りに向けてリズムの取り方を理解するため、「どんぶり」「オレンジ」「ナゲット」など普段使う言葉でリズムを表した「リズムカード」を用いた練習を行った。なお、この「リズムカード」は学生が考案し前もって作成したものである。また、リズムだけでどのように曲を演奏できるのか、タップやドラムやデッキブラシのみで演奏する動画も視聴した。

そして参加者を2班に分け、「楽器マスター」に扮した学生の指導のもと、缶やペットボトル、紙箱や割り箸、輪ゴム、テープといった身近な材料で楽器を作成した。学生から参加者に「面白いね」「どう工夫したの」といった声掛けすることで、参加者が嬉しそうに紹介したり、実際に音を鳴らしたり、話すうちにもっと工夫ができそうだ

と作り込んでいったりする様子が見受けられた。その後リズムカードを用いて簡単な曲作りを行い、合奏練習を行った。上手に合奏できない班では、まずは手拍子で合わせてみるといった工夫のもと練習を重ねていた。最後は演奏発表し、感想を述べあった。参加者に感想を求める際には、リズムや楽器、音づくりの工夫といった観点から学生が尋ねることで答えやすいように配慮していた。

(2)グループ2:「アダプテッドスポーツ」

グループ2では、社会の中にさまざまな形で存在するハンディキャップについて参加者が知り、正しく理解してもらうことをねらいとして、アダプテッドスポーツを体験し、考案を通して探究する講座を実施した。当日は、小学3年生が2名、4年生が2名、6年生が1名、中学2年生が2名の計7名が参加した。講座の構成と具体的な展開は以下の表の通りであった。

表2-2 グループ2の講座タイムテーブル

時間	活動内容
13:00	オリエンテーション, 約束ごと
13:10	アダプテッドスポーツの説明
13:35	ボッチャ体験
14:10	ボウリングをアダプテッドスポーツとして考案するワーク
15:30	発表
15:40	まとめ, 関連する映画の紹介

グループ2では試合など体を動かす内容を活動に含んでいたことから、オリエンテーションでは「守ってほしい約束」を参加者に伝え、安全へ配慮していた。アダプテッドスポーツの説明では、パラスポーツとの違いや具体的なアダプテッドスポーツの例について述べた。ただスライドで説明するだけでなく、目隠しをしておのハンディキャップ体験を交えることにより、障害がある人とそうではない人がともにスポーツを楽しむには工夫が必要であることの理解を促した。続いて行われたボッチャ体験では、参加者がこの工夫の必要性をより体感的に学ぶことができ、また学生-参加者間のアイスブレイクとしても機能した。

その後、参加者を2つの班に分け、ボウリングに工夫

したルールを加えることで、アダプテッドスポーツとして考案するワークが行われた。ここでは、車いすを使う人がいる場合、全盲の人がいる場合をそれぞれ想定したルールを検討した。中に入れる水の量で重さを調整できるペットボトル、大きさや柔らかさの異なるボールを用い、さまざまな条件のもとで実際にプレーしながらルールを考えていった。全盲の人を学生がロールプレイングした際には、参加者が学生を話し合いの輪に入れずルール作りを進めていく場面もあったが、進行役の別学生が「話し合いに入りたいと思っているんじゃないかな」と声をかけたり、ロールプレイングする学生が「見えないから、話の内容がわからないよ」と伝えたりすることで、参加者は次第に適切な配慮のもとで話し合いを行えるようになっていった。

各班で考案したルールを発表、実演した後、学生から参加者に向けたまとめとして、障害のあるなしに関わらず人がともに活動するときには、相手の目線に立って考えることが重要であると伝え、後学の際に参考となる映画を紹介し、講座を終了した。

(3)グループ3:「発想力」

グループ3では、商品開発におけるオリジナリティと、それを生む発想力の重要性を理解してもらうことをねらいとして、ケーキの考案を通じオリジナリティを探究する講座を実施した。当日は小学2年生1名、3年生2名、5年生1名の計4名が参加した。講座の構成と具体的な展開は以下の表の通りであった。

表2-3 グループ3の講座タイムテーブル

時間	活動内容
13:00	オリエンテーション
13:30	商品開発とオリジナリティの説明
14:00	オリジナルなケーキを考えるワーク
14:45	発表と意見交換
15:15	まとめ

オリエンテーションとして学生の自己紹介と趣旨説明を行った後、アイスブレイクとして参加者同士での他己紹介を行った。そして、学生から参加者に「みんなは売れないケーキ屋さんの店長になりました。売れるケーキを

考えて、お店を復活させましょう！」と投げかけ、人気のケーキを紹介し、どのケーキにも工夫や特徴があることを確かめた上で、売れるためにはオリジナリティが大切だということを伝えた。そして、「みんなの発想力でオリジナルなケーキを作ろう」とケーキを考えるワークにつないだ。

ケーキを考える際には、どうしたら面白いケーキになるか、そのためにどんな味や色彩、トッピングの工夫が必要かを学生から問いかけることで参加者の発想を引き出すファシリテーションを行った。また、参加者の考えたケーキについて、「どうしてこの材料を使うの？」といった発想のもとをたどる質問を投げかけることにより、参加者自身では言語化しきれていなかったケーキの特徴や良さを引き出すことができていた。

参加者からは、写真に映える「うさぎケーキ」や沖縄県産品を使った「塩黒砂糖ケーキ」、栄養が取れる「キャベツケーキ」など、さまざまなオリジナリティをもったケーキが発表され、意見交換では良いところを評価しあった。講座の最後には、学生から参加者へ「自分にしか出せないオリジナリティが、売れる商品を生む」ことを伝えてまとめとした。

(4)グループ4:「地域探究」

グループ4では、地元に興味をもつきっかけをつくることをねらいとして、岐阜県の魅力を探究する講座を実施した。参加者は小学4年生が1名、5年生が4名、中学1年生が1名の計6名であった。講座の構成と具体的な展開は以下の表の通りであった。

表 2-4 グループ4の講座タイムテーブル

時間	活動内容
13:00	オリエンテーション
13:20	岐阜すごろくゲーム
13:50	グループ内でまちの良さをあげてみる
14:10	岐阜の良さを感じられるお店を考える ワーク
15:15	各グループで考えたお店の発表
15:40	良いと思うお店に投票
15:55	表彰式、まとめ

オリエンテーションとして学生の自己紹介と趣旨説明を行った後、班分けを兼ねたアイスブレイクを実施した。その後、2つに分かれた班で学生が事前に作成した岐阜すごろくゲームに取り組んだ。このすごろくゲームは学生が前もって作成したもので、各マスに岐阜の観光スポットや名産品が記されており、遊びながら岐阜の魅力を知ることができる。すごろくのマスに書かれているものを参加者が知らなかったときには、各班のファシリテーター役の学生がタブレット端末等で検索して見せ、理解を深められるようにしていた。このすごろくで遊び、県内各所にある良さを知った上で、参加者に「自分自身の考えるまちの良さ」を問いかけ、次のワークへつなげた。

続くワークでは、班ごとに岐阜の良さを感じられる店を考案した。ここでは、すごろくで知った魅力や、自分自身の考えたまちの良さを踏まえながら、岐阜に初めて来た人が岐阜の良さを感じられる店を考えた。学生が各班に入り、参加者の提案や意見を書き出しながら、模造紙にまとめていった。途中、ある参加者がほかごとを始め、班活動に協力的でなくなる場面があったものの、学生がその参加者のやっていることを活動に関わるように誘導したり、ある程度好きなことをさせて見守ったりと対応したことで、重大な支障をきたさず班活動を進めることができた。

そして「No.1決定戦」と銘打ち、各班で考えたお店のコンセプトやアピールポイントを発表しあった。各班で考案したお店は、お祭りのような出店が立ち並ぶ中に鍛冶など地域産業の見学体験ができる場所を設えた「市民の森」、鶺鴒の標本や映像の展示と鮎を使った料理等の販売を行う「鶺鴒を紹介するお店」という提案があった。発表後は、学生や参加者、教員も加わって投票を行った。18票の投票があり、結果は引き分けとなった。司会学生の機転で両班を優勝とすることにし、参加者全員を表彰して講座を終えた。

4. 本授業の成果ならびに今後の課題と展望

本稿では、令和5年度に開講した「学習者の特性と支援方法」の開講経緯や授業内容、授業の一環として受講生が実践した小中学生向けの講座について詳述してきた。最後に、本授業の成果として一連の取り組みから受講生

が得られた学びについて考察し、残された課題と令和6年度以降に向けた展望を述べる。

(1) 本授業の成果にあたる受講生の学び

① 受講生の振り返りレポートから

まず、本授業の最後に課した振り返りレポートから、受講生自身が本授業を通して学んだと感じているところをあげていく。レポート中で、授業において学んだこととして、実践に向けたグループワークの進め方(7名)、実践における小中学生への対応や配慮すべき事柄(5名)という2つの事項をあげた受講生が多かった。他には、小中学生やその保護者と実際のやりとりをしたことで、外部に対する責任を意識しながら企画を進める経験ができた、社会教育士に求められる3つの能力、すなわち、ファシリテーション能力、コーディネーション能力、プレゼンテーション能力を培うことにつながる実践経験ができたという意見もあった。

グループワークについては、特に授業時間外の講座準備において、一部受講生に負担が集中したグループが複数あった。負担が多かった受講生からも、任せてしまった受講生からも、分担できるようにすべきだったと意見が出ている。そしてその具体策として、連絡を綿密に取りメンバーの状況を逐次共有すること、授業時間内に役割分担を明確にすること等があげられていた。受講生はグループワークを進める中で、円滑かつ公平に作業を進めるための自身の振る舞いについて実際的な学びを得られたと考えられる。なお、グループワークの円滑な進め方は授業設計を行う担当教員にとっても課題であるため、このことは次節においても検討する。

小中学生への対応や配慮すべき事項については、講座の実践中に起きたさまざまなトラブルに対し、受講生が臨機応変に対応したことが自身の学びにつながったという記述が多く見られた。各グループにおいて、参加者である小中学生が集中力を切らしやる気をなくしてしまう、自分の主張が通らず他の参加者と言ひ合いになってしまう、素直に楽しさを表現することが難しく反抗的な言葉を重ねてしまう、といったトラブルが見受けられた。いずれも小中学生への対応に慣れた受講生が小中学生の目線に立ち、寄り添いながら活動を促すことで、大きな問題に発展することなく講座を進めることができていた。また、

あるグループでは当初予定していた台本通り進行したところ、参加者に言葉の意味が伝わらない場面があり、司会役とは別の受講生が咄嗟に言い換えたり、例え話を出したりして小中学生の理解を促す場面もあった。

② 担当教員の気づきとして

上述した小中学生への対応や配慮について、受講生の振り返りレポートには特筆されていなかったものの、教員から見ると、授業中の講義や企画を立てるグループワークの中でも学びが蓄積されていたと考えられる。

例えば、グループ3の企画において、本授業1日目の時点では、複数メンバーの関心ある分野から講座テーマを「経済学」、「需要と供給」にするという案が出たものの、議論していく中でこうしたテーマは中学生でも理解が難しいため、両方のワードから発想した「マーケティング」を新たなテーマとし、その一面を参加募集対象の小学3年生レベルまで落とし込むことで講座を企画することとした。しかし、本授業2日目において、酒井氏から小中学生に向けた講座を組み立てる際に注意すべき観点や、各グループに対する直接的な助言が行われる中で、小中学生の目線で魅力的で楽しい企画とするためにテーマの再検討がなされた。最長でも3時間という講座の時間枠の中で、マーケティングをどの角度から小中学生に探究的な学びを得てもらおうか、小中学生にとってわかりやすく楽しめる講座内容のアイデアが生まれず、議論は非常に難航した。結果的に、あるメンバーから、議論中に出てきた子どもの好きなものとしての例示物「ケーキ」と、マーケティングの基本である「ものの値段の決め方」を組み合わせつつ、難しい経済学の話を経由せずに「商品の価値を高めるためには発想力が大切だ」というマーケティングの話に帰着するよう、「ケーキのアイデアを考えるワークから『発想力』の大切さについて授業してみてもどうか」という意見が出て、メンバー全員の合意のもと同テーマで講座が実践されることとなった。

小中学生の理解力や楽しめる題材にこだわってテーマを考案した結果、同チームの講座は終了後アンケートにおける「今回の講座は楽しかったか」という問いに対し、4人の参加者全員から最高評価(楽しかった)という回答を得ることができていた。ただ、講座から学べたこととして参加者は「ケーキ作りに役にたつ」「商品開発の役に立

つ」をあげており、受講生が本来意図していた「発想力の大切さ」という抽象的な理解にまでは至らなかったようである。受講生が想定していた以上に、参加者である小中学生にテーマを理解させることは難しかったという結果となったものの、グループでの振り返りでは、この要因について参加者であった小中学生が抽象的な事柄の理解そのものの発達段階にある年齢層であった、受講生からの伝え方がその年齢層にとって十分ではなかったという両面の意見が出ていた。

他のグループにおいてもグループ 3 と同様に、小中学生目線での企画とするための練り直しや反省が見られた。テーマ決定や講座内容を企画していく段階から、実践を経て振り返るまでに、本授業の科目名である「学習者の特性と支援方法」に対する検討を段階的に重ねることができ、深められたものと考えられる。

また、本授業におけるグループワークでは、各グループにおいて社会教育主事任用資格・社会教育士称号の取得希望者が議論を牽引していた。他の社会教育士(社会教育主事)養成課程の授業においてグループワークや議論、発表を多く経験している蓄積を發揮し、本授業を通して社会教育士として組織で企画を立案し実施するまでの擬似的体験をすることができていたと思われる。非希望者である受講生も取得希望者の振る舞いからグループでの議論や作業の進め方について学ぶことができており、いずれの立場の受講生にとっても学び合いの場になったといえよう。

(2) 今後の課題と展望

最後に、令和 6 年度以降の授業実施に向け再検討すべき課題を整理し、展望を述べて本稿を終えることとする。

開講初年度の経過を踏まえると、令和 6 年度に向けた本授業の課題としては主に 2 点のことがあげられる。

第一に、講座の企画から実施までを前学期中に遂行する本授業において、どこまでの発想や作業を受講生に求め、どこから教員側で用意するか、という点である。令和 5 年度は、講座を作り上げ実施するまでの一連の流れを体験してほしいという思いから、企画の発案から広報の作成、参加者の募集や対応、物品の準備、本番の実施に至るまでの全てを授業内容として盛り込んだ²⁾。受講生の振り返りレポートでは、一連の活動を実践できる点を本

授業の良さとして評価する声もある一方、授業ならびに授業時間外学習を含めた単位当たりの授業規定時間数に対し検討すべき内容や作業の量が過多であり、結果として本授業の科目名に冠した「学習者の特性と支援方法」の検討、すなわち、小中学生に対する講座のあり方、講座内容の構成、参加者の学びに対する支援方法等に関する検討について、授業時間内に十分な時間を確保することができなかった。したがって、令和 5 年度はこうした議論の大半を授業時間外のグループワークに任せることとなり、このことが次に述べる課題の要因ともなった。次年度以降の本授業の構成ならびに受講生に課す議論や作業については、本授業の趣旨を踏まえ再検討していく必要がある。

第二に、複数のグループから、授業時間外に進めるべき議論や作業の公平な分担やスムーズな進行が難しかったという意見が寄せられた。その結果として、グループのリーダーや、社会教育主事任用資格・社会教育士称号の取得希望者である受講生に多くの負担がかかる傾向がみられた。授業時間外のグループワークが難航する要因はさまざまに連想できるが、令和 5 年度の各グループを見る限りでは、本授業に対する意欲の差が主な要因ではないかと思われた。議論や作業に対する意欲の度合いが受講生によって異なることは、全学に開かれた本授業の位置付けゆえ当然のこととも考えられるが、その差を縮めるための動機づけを検討していく必要がある。また、授業外の状態については担当教員も把握しきることが困難であるため、上述した授業内容の整理を通じ、授業内で完結できる議論や作業を増やしていく必要があると考えられる。

以上の成果と課題を踏まえた上で今後の展望として描けることは、本授業における講座を毎年継続していくことにより、受講生が企画実施する講座を大学と地域社会をつなぐ恒例事業とすることである。本授業で実施する講座は、受講生にとっては自身の学びを実践し、その実践からさらなる学びを得る場である。一方、各グループでとった参加者アンケートでは、「講座を機に子どもが作曲に興味を持った」、「学校の授業より自由で、学べたようだ」といった保護者からの回答や、「自分の考えを言えてよかった」、「もっと鵜飼のことを知りたい」、「みんなアイデアを出すのが面白かった」といった小中学生からの感想が聞かれ、参加者である小中学生にとっても学

びの場となったことが窺える。したがって、受講生の実施する講座は、大学生が地域の子どもたちと交流し学び合う場であり、継続していくことにより大学や大学生の知を地域社会へ還元する場として展開していくことも可能であると考えられる。

地域社会には、行政をはじめとしてコミュニティ組織を含む NPO、企業、個人などさまざまな主体が存在している。今後デジタル社会が進展していく中であっても、生活を営んでいく物理的な空間は地域にあり続けることから、さまざまな主体相互間の情報共有やコミュニケーションはより重要なものとなっていく。こうした状況の中で、地域社会に学び、地域社会に知を還元していくことは大学の使命である。また、学校（大学）と地域社会をつなぎながら、異なる他者同士が相互理解を深め、互いを信頼し支え合える関係性が築かれるよう調整し、学びの場を作り出していくことは社会教育士に求められる役割でもある。上述の課題を克服していくことで、本授業におけ

る実践は大学と地域社会をつなぐ社会教育実践へと展開していくことが期待される。

謝辞

本授業において小中学生向け講座を実施するにあたり、岐阜県教育委員会にご理解いただくとともに、岐阜市教育委員会および羽島市教育委員会から各小中学校に対する周知のご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

¹取得を希望するにあたって届出制を取っていないため、担当教員が把握している人数である。

²参加者募集においては、教員側でも謝辞で紹介した教育委員会へ依頼し、各学校において周知がなされるようにしたが、受講生各自でも参加者を募るよう呼びかけた。実際に受講生は近隣の学童保育や児童館に対してチラシ配布による広報活動を行っていた。